

大学生のスポーツ経験と意識に関する調査結果ダイジェスト

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催は、わが国におけるスポーツの価値を見直す良い機会になることが期待されています。本調査では大学生を対象にスポーツにおける体罰・暴力の経験やオリンピック・パラリンピックに対する意識、大学スポーツ推進に関する意識などを調査しました。

調査の概要

調査期間：2016年9月1日から11月16日

調査対象：全国大学体育連合の会員大学14校および短期大学2校

回答者：学生5,861人（男性：3,326人、女性：2,535人）

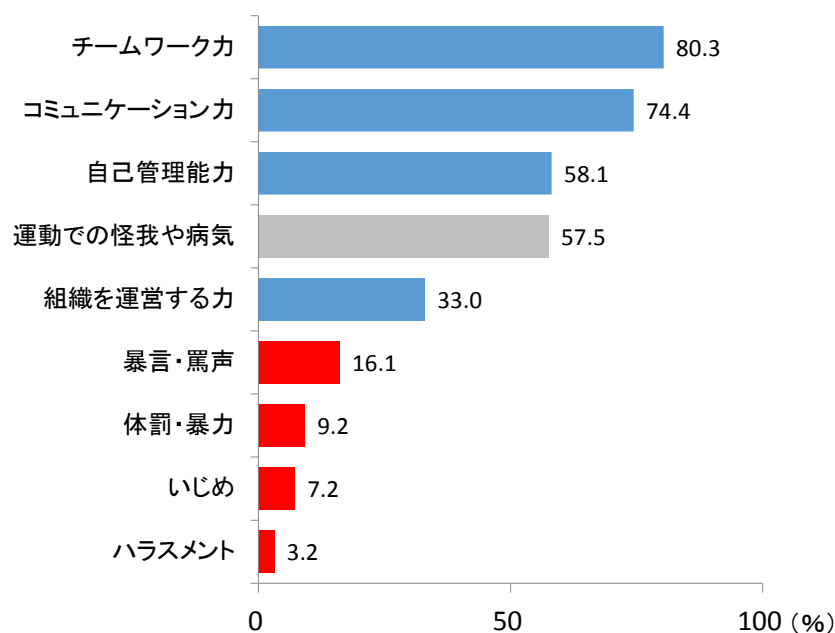
1年生4,173人、2年生953人、3年生428人、4年生307人

結果報告：本ダイジェストおよび報告書（会員限定）はウェブサイトに掲載中

I. スポーツにおける体罰・暴力の経験

I-1. スポーツ活動を通じて身につけたり経験したりしたこと（複数回答）

回答者5,861人のうちスポーツ活動の経験がない365人を除いた5,496人中、80.3%（4,416人）が「チームワーク力」、74.4%（4,089人）が「コミュニケーション力」、58.1%（3,195人）が「自己管理能力」が身についたと回答した。一方、57.5%（3,162人）が「運動での怪我や病気」を経験していた。そして、16.1%（884人）が「暴言・罵声」、9.2%（508人）が「体罰・暴力」、7.2%（396人）が「いじめ」、3.2%（174人）が「ハラスメント」を経験していた。2013年に行った「運動部活動等における体罰・暴力に関する調査」では、3,638人中20.5%の学生が体罰・暴力を経験していた。これに比較すると今回は体罰・暴力の経験者は9.2%で大きく減少している。



I-2. スポーツ場面で体罰・暴力を受けた人のスポーツ種目（複数回答）

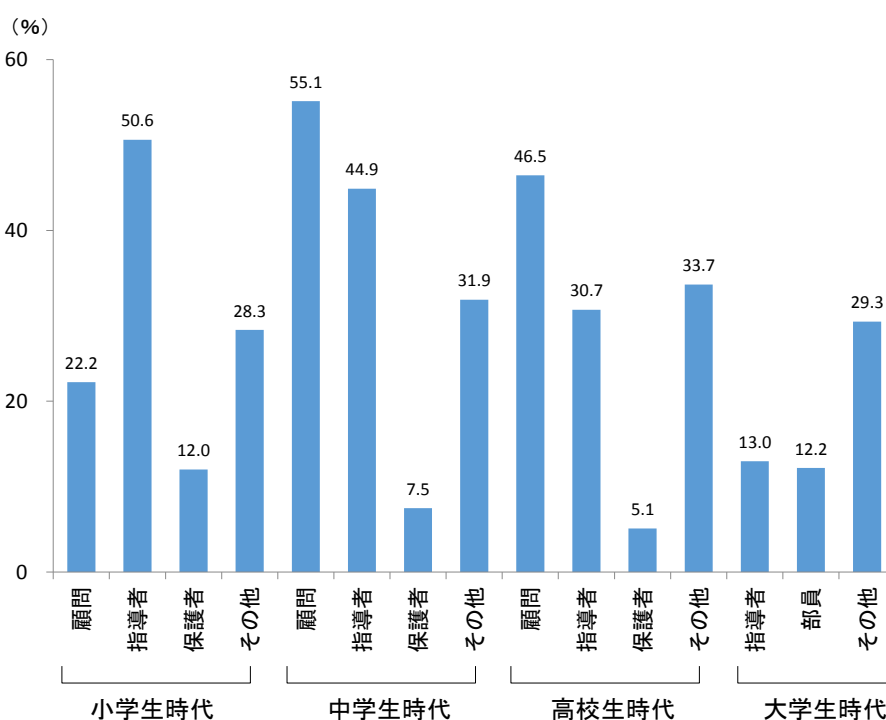
体罰・暴力を受けた人のスポーツ種目では、男性においては野球が最も多く 7.9%（257 人）、次にサッカー 5.3%（173 人）、バスケットボール 4.0%（129 人）と続いた。女性においてはバレーボールが最も多く 3.6%（78 人）、次にバスケットボール 3.0%（65 人）、水泳 2.0%（44 人）と続いた。割合は各性別のスポーツ経験者を母数として示した。なお、本調査では各スポーツ種目の経験人数は把握していないため、競技人口そのものが体罰・暴力を受けた人数に影響している可能性がある。

男性			女性		
種目	人数	%	種目	人数	%
野球	257	7.9	バレーボール	78	3.6
サッカー	173	5.3	バスケットボール	65	3.0
バスケットボール	129	4.0	水泳	44	2.0
陸上	71	2.2	陸上	27	1.2
水泳	66	2.0	バドミントン	25	1.1
剣道	52	1.6	剣道	20	0.9
バレーボール	47	1.4	ソフトテニス	20	0.9
柔道	43	1.3	野球	13	0.6
ソフトテニス	39	1.2	硬式テニス	13	0.6
卓球	38	1.2	弓道	12	0.5
ハンドボール	31	1.0	柔道	11	0.5
バドミントン	30	0.9	卓球	9	0.4
ラグビー	29	0.9	体操競技	8	0.4
硬式テニス	17	0.5	ハンドボール	8	0.4
体操競技	16	0.5	新体操	7	0.3
弓道	9	0.3	サッカー	7	0.3
新体操	8	0.2	ラグビー	6	0.3
その他	110	3.4	その他	63	2.9

I-3. スポーツ場面で体罰・暴力を誰から受けたか（複数回答）

小学生時代～大学生時代のいつ誰から体罰・暴力を受けたかについて、体罰・暴力の経験者 508 人を母数とした割合を示した。最も多いのは「中学生時代に顧問」55.1%（280 人）、次に「小学生時代に指導者」50.6%（257 人）、「高校時代に顧問」46.5%（236 人）であった。

運動の楽しさを知り、運動能力が著しく発達するゴールデンエイジの小学生時代に保護者から体罰・暴力を受けたと回答した者が 12.0%（61 人）であった。

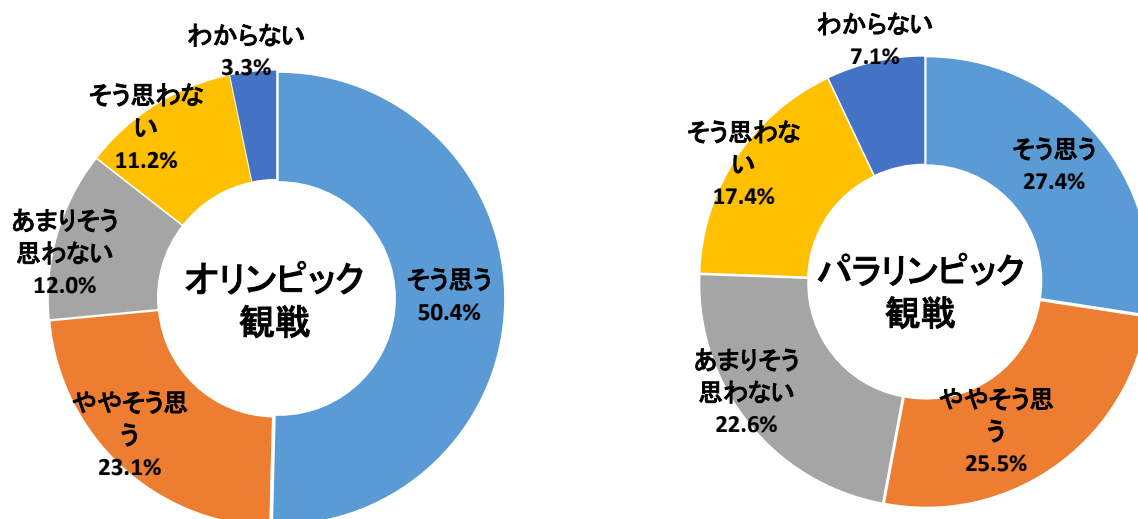


II. オリンピック・パラリンピックに対する意識

II-1. オリンピック・パラリンピック東京大会（2020年）を直接、競技場で観戦したいか

オリンピック東京大会について、「そう思う」50.4%（2,953人）、「ややそう思う」23.1%（1,353人）を合わせた73.5%（4,306人）が直接観戦したいと思っていた。

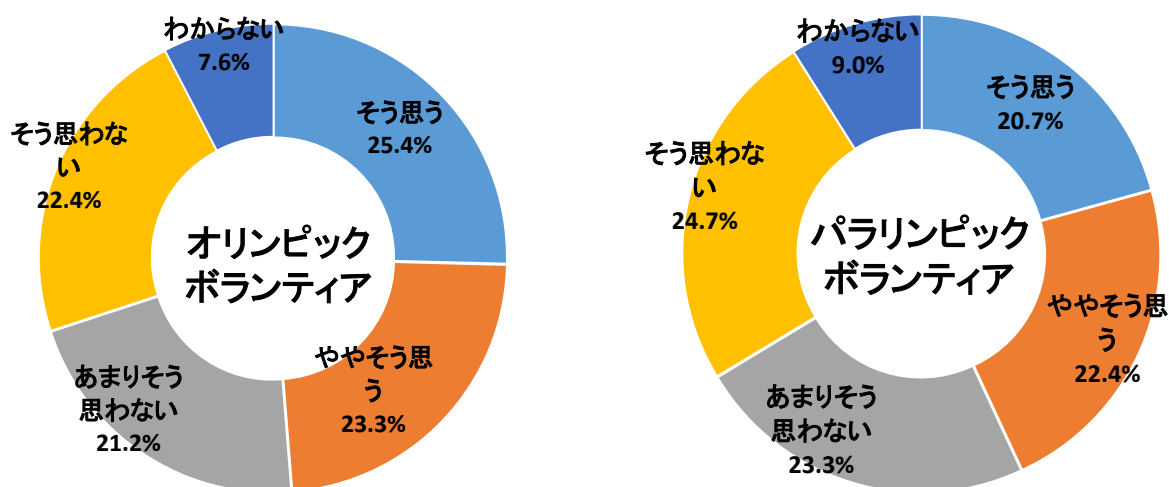
パラリンピック東京大会について、「そう思う」27.4%（1,606人）、「ややそう思う」25.5%（1,494人）を合わせた52.9%（3,100人）が直接観戦したいと思っていた。



II-2. オリンピック・パラリンピック東京大会（2020年）で運営や世話のボランティアをしたいか

オリンピック東京大会について、「そう思う」25.4%（1,485人）、「ややそう思う」23.3%（1,363人）を合わせた48.7%（2,848人）が大会運営や世話のボランティアをしたいと思っていた。

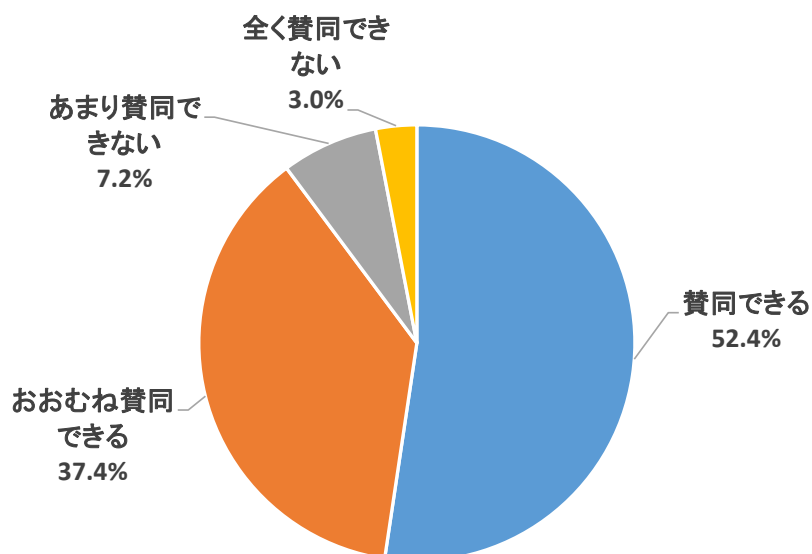
パラリンピック東京大会について、「そう思う」20.7%（1,211人）、「ややそう思う」22.4%（1,308人）を合わせた43.1%（2,519人）が大会運営や世話のボランティアをしたいと思っていた。



Ⅲ. 大学スポーツ推進に関する意識

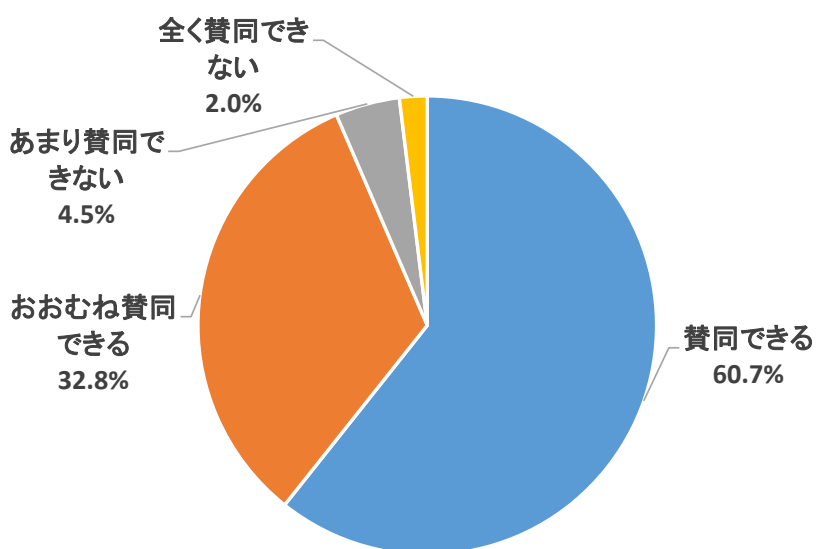
Ⅲ-1. スポーツ推薦や強化指定部などで自分の大学が競技スポーツに力を入れることについて

「賛同できる」52.4%(3,060人)、「おおむね賛同できる」37.4%(2,188人)を合わせた89.8%(5,248人)が、大学が競技スポーツに力を入れることについて前向きな意見であることが示された。「あまり賛同できない」7.2%(418人)、「全く賛同できない」3.0%(178人)であった。



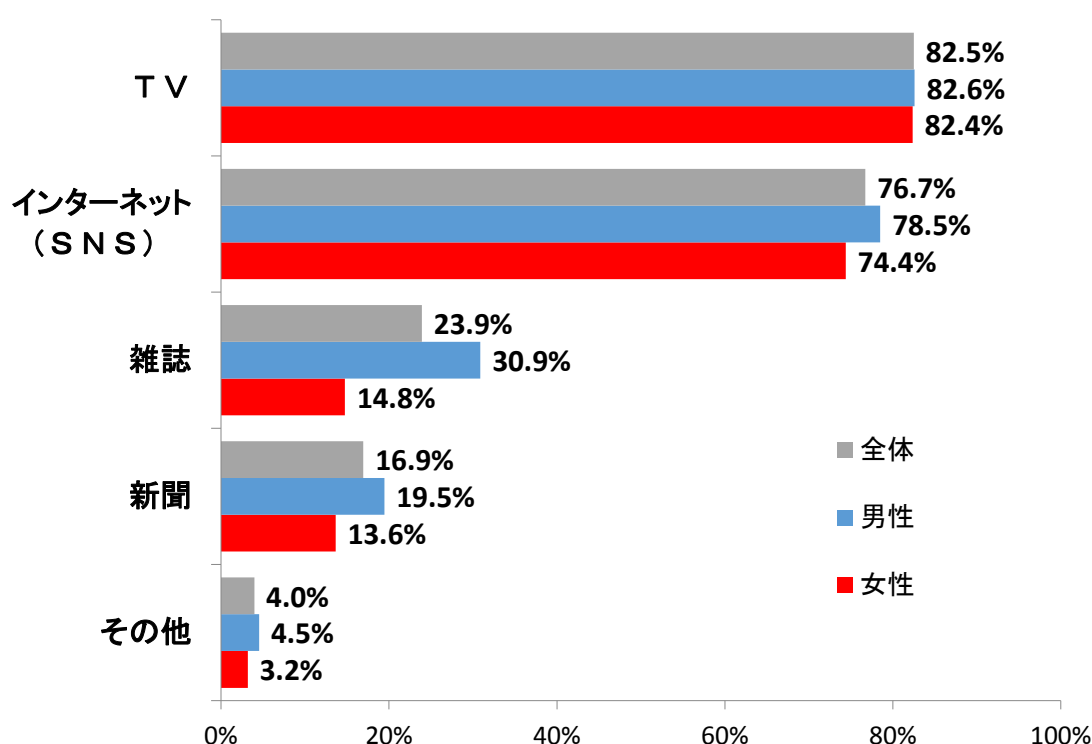
Ⅲ-2. 運動部学生に対する学修支援やキャリア支援を大学が行うことについて

「賛同できる」60.7%(3,546人)、「おおむね賛同できる」32.8%(1,918人)を合わせた93.5%(5,464人)が、大学が運動部学生に学修支援やキャリア支援することについて前向きな意見であることが示された。「あまり賛同できない」4.5%(265人)、「全く賛同できない」2.0%(114人)であった。



IV. スポーツに関する情報を得るために利用するメディア

男女全体では、「TV」が最も高く 82.5% (4,835 人)、次に「インターネット (SNS)」が 76.7% (4,497 人)、「雑誌」が 23.9% (1,401 人)、「新聞」が 16.9% (993 人) と続いた。男女別では「TV」、「インターネット」の割合はほぼ同様であったが、「雑誌」では女性が 14.8% (374 人) であったのに対し男性が 30.9% (1,027 人) と男性の方が女性よりも雑誌を利用している者の割合が高かった。平成 27 年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査 (総務省、2016 年 8 月) によると、10 代、20 代のモバイル機器によるインターネット利用時間は突出して長くこの数年増加傾向が報告され、20 代の平日利用時間は 103.7 分、休日利用時間は 166.0 分であったことが示されている。スポーツに関する情報を若年層へ伝える手段として従来の TV 放送に加え、モバイルのコンテンツを充実させることが有効となると考えられた。



作成：大学体育関連情報調査チーム
難波秀行 (日本大学)・小林勝法 (文教大学)